

安閑天皇、

初め勾大兄皇子と稱し、

繼體帝の庶長子なり。

母は妃日子媛。天皇、

墻宇凝峻にして、得て窺ふべからず。

寛大にして人君の量あり、

繼體帝の七年、

立ちて皇太子となる。

二十五年、二月七日丁未、

繼體帝、位を皇太子に傳へ、

皇太子、天皇の位に即く。

時に年六十八。

是を勾大兄廣國押武金日天皇となす。

是の日、繼體帝崩ず。

大連大伴連金村・

物部連鹿鹿火、

故の如し。

冬十二月五日庚子、
繼體天皇を葬る。

元年甲寅、春正月、
都を倭勾金橋に遷し、
因て宮號となす。

三月六日戊子、
妃春日山田皇女を立てて

皇后となし、
紗手媛・香香有媛・
宅媛の三妃を納る。

夏四月、皇后の為に伊甚屯倉を定む。

五月、百濟、
使を遣はして朝貢せしむ。

冬十月十五日甲子、
大連金村に勅して曰く、

朕、嗣子なし、
萬歳の後、朕が名其絶えんか。

伯父、宜しく之が計を爲すべしと。

金村、奏して曰く、

天下に王たる者は、

嗣あると嗣なきとを論ぜず、

要は須らく

物に因て名を爲すべし。

請ふ、

三妃の為に屯倉を置きて、

以て後世に示さんと。

之に従ひて、

小墾田屯倉と毎國の田部とを以て、

紗手媛に賜ひ、

櫻井屯倉と毎國の田部とを以て、

香香有媛に賜ひ、

難波屯倉と毎郡の

鑿丁とを以て、

宅媛に賜ひぬ。

うるふ
閏十二月四日壬午、
みづのえうま

みしま ぎやうかう
三島に行幸す。

こ
是の月、

むさし ひとかさはらのあたへおみ
武蔵の人笠原直使主、

そ ぞくをき
其の族小杵と

くこのみやつこ
國造たらんことを争ひ、
あらそ

をき
小杵、

すくひ かみつけぬのきみ をくま
援を上毛野君小熊に乞ひて、

おみ ころほつ
使主を殺さんと欲す。

おみ
使主、

はし みやこ いた じやう まう
走りて京に至り状を言す。

ちよく
勅して、

おみ もつ くこのみやつこ
使主を以て國造となし、

をき ちう
小杵を誅せしむ。

おみ よこぬ
使主、横渟・

たちばな おほひ くらす
橘花・多氷・倉櫟の

しよ みやけ けん
四所の屯倉を獻ず。

二年乙卯、

春正月五日壬子、

詔して曰く、

間者、連年登穀して、

接境虞なく、

蒼生、

稼穡を樂しみ、

黔首、飢饉を免れ、

仁風、宇宙に暢び、

美聲、

乾坤に塞り、内外清通し、

國家殷富なり。

朕、甚だ焉れを欣ぶ。

大酺五日すべしと。

夏四月丁丑の朔、

勾舍人部・

勾鞞部を置く。

五月九日甲寅、きのえとら

筑紫の穂波・鎌、つくし ほなみ かま

豊國の陸崎。とよのくに みさぎ

桑原・肝等・大抜・我鹿、くわばら かと おほぬく あか

火國の春日部、ひのくに かすかべ

播磨の越部・牛鹿、はりま こしべ うしか

吉備後國の後城・きびのみちのしりのくに しりぎ

多禰・來履・たね くにつ

葉稚・河音・はわか かはおと

婀娜國の膽殖膽・年部、あだのくに ゐゑ ゐ としべ

阿波の春日部、あは かすかべ

紀國の經湍、きのくに ふせ

河邊、丹波の蘇斯岐、かはべ たには そしぎ

近江の葦浦、ちかつあふみ あしうら

尾張の間敷・入鹿、をはり ましき いるか

上毛野の緑野、かみつけぬ みどりぬ

駿河の稚贄の屯倉を置く。するが わかにへ みやけ おく

秋八月乙亥の朔、あき きのとみ ついたち

諸國に詔して、しょこく みことのり

犬養部を置かしむ。いぬかひべ お

九月三日丙午、ひのえうま

櫻井田部連・縣犬養連・さくらみのたべのむらじ あがたのいぬかひのむらじ

難波吉士等に詔して、なにはのき じら みことのり

屯倉の税を掌らしむ。みやけ ぜい つかさど

十三日丙辰、ひのえたつ

勅して、しよく

牛を難波の大隅島・うし なには おほすみのしま

媛島松原に放つ。ひめしまのまつばら はな

冬十二月十七日己丑、ふゆ つちのとうし

天皇、勾金橋宮に崩ず。たんわう まがりのかなはしのみや ほうず

年七十。

河内の舊市高屋丘陵に葬る。かふち ふるいちのたかやのをかのみささき ほうむ

追諡して安閑天皇と曰ふ。つゐし あんかんでんわう い